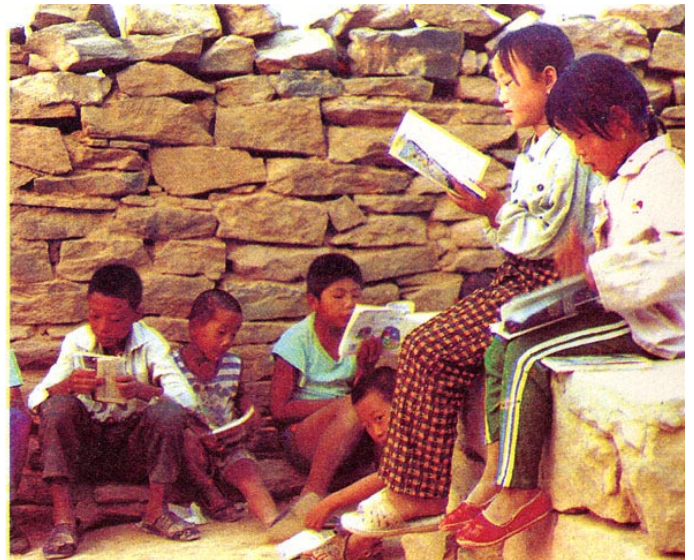


収穫期の仕事はどんなに辛くても誰も文句をいみませんが、それは劉家山村の人も同じです。1998年盛夏の麦の収穫期です。村人たちは脱穀場となる広場に集まってきつい労働をしなければなりません。ある者は麦の脱穀し、ある者は脱穀後の殻を煽って払い、ある者は脱穀の済んだ麦をカマスに詰めるといった具合で、(脱穀場は人の声や機械の音で) がやがやガチャガチャと騒がしいのですが、決まった流れの中で作業は進められて行きます。赤ん坊を抱いたり、尻に幼児を従えた村の女達も集まって来ており、その子ども達の中で、太った女性の後ろにずっと張り付いていた小さな女の子が私の視線を捉えました。皆とても忙しいので、私のような暇人に関心を持つものなど誰もいませんが、この子は私の方をじっと見つめていました。私の手にしたカメラに好奇心をそそられたのかもしれませんが。

翌年、又、劉家山村を訪れると、村長は私が学校に泊まれるよう手配してくれました。ある朝、ぐっすり気持ちよく眠っていると、甲高く読書する声で眼を覚まされました。オンドルを下り外へ出て見ていっぺんに愉快的気持ちになりました。何人かの子どもたちが壁際にしゃがんで、教科書を読んでいるのです。読む速度もまちまちなら、語調には濃厚な地方訛りがあってワーワーと聞こえるだけで何を言っているやら全く分かりません。もうとても眠れそうもないので、それならばとカメラを手に子供たちを写すことにしました。カメラを覗いているうちに私は又あの(脱穀場の)女の子を見つけました。その子も一心に教科書を読んでいた。

2001年8月の昼下がり、私は煥煥というこの子の家を訪ねてみました。煥煥は昼寝をしていましたが、私が来たとき聞かされると直ぐに起きて、みかん色の服に着替え私の写真の被写体になってくれました。ところが、妹の姚姚はご機嫌斜めでした。おそらく寝入りばなのところを起こされて眼を覚まし、まだしっかり目覚めていなかったのでしょう。姉妹一緒にの写真は一方は笑い顔、一方はふくれ面でそれはそれで面白いものになりました。お母さんはいたずらちび助も何とか写真に加えたいと思ったようですが、まだ目が覚めていないちび助もワーワーと大声で泣き出す始末でした。



早读的娃娃

夕方、家族全員で山間のサツマイモ畑へ草を鋤きに出かけるというので私も一緒について行きました。煥煥は何歳か年長だけあって流石に仕事をする格好は様になっていますが、姚姚の方はまるで不器用です。まあ、(農作業に)慣れてないということもありますし、大人の方も彼女の労働力を当てにしている訳ではなく、子供たちに小さな時から食べることの大変さを分からせたいと思っているのです。

陝北の人がいつも言う言葉があります。「穴を一つ掘れば、一個多く饅頭が得られる」この簡単素朴な道理が黄土高原の日常生活の中でこんな風にゆっくりと子供たちの心の深いところに植えつけられてゆくのです。(田井訳)



煥煥、姚姚と弟 →

お母さんと一緒に ↓

